広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第34号　2006. 3〉

「特色ある教育実習プログラム」の試行的取組

若元　澄男　松浦　伸和　西根　和雄　前田　俊二
志水　康雄　磯﨑　哲夫　小山　正孝　長松　正康
由井　義通　江端　義夫　倉地　曉美　柳原　英兒
宮本　栞　岡野　説子　一鍬田　徹　古賀　一博
岡本　祐子　神山　貴弥　林　俊雄　上之園　強
見藤　孝二　河野　芳文　原田　良三　今﨑　英明
金丸　純二　竹盛　浩二　廣澤　和雄　米神　博子
岡野　佳子　此枝　昇

1　「特色ある教育実習プログラム」の概要

教員養成における不易と流行の課題を踏まえ，より充実した教育実習のあり方について，平成16年度広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第33号に「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」とのテーマでプロジェクト（教育学部教育実習部会委員及び附属学校園副校園長等で構成）として研究に取り組み，その結果を下掲の表－１及び表－２のような構想で提案した。その際，不可避の課題として確認した問題の第一は，教育実習に関わる科目とその履修時期に関する事項であった。現行の教育実習においては，大多数の学生は，１単位の事前指導（観察実習）と５単位又は４単位の本実習（教壇実習）を，３年次又は４年次に履修することになっている。それ以前は教育実習に関わる科目が開設されておらず，いわば１年次及び２年次は，教育実習の視点からみた場合には放置状態である。このことについては，教育実習に関するアンケート等からも，教育学部に入学したのに，児童生徒と触れ合う機会が少ない，教育実習での体験を反省したり，認識した課題を解決したりする機会がほとんどないというような学生サイドの不満や大学及び附属学校の教員等からの問題指摘もある。第二の問題点は，教育実習の実施校園に関することである。現行の教育実習では，学生達は原則として広島大学の附属学校園において実習を行っている。言うまでもなく附属学校園における教育実習は多大な意義を有

表－１　小学校教育実習の４年間

１年生	２年生	３年生	４年生
ふれあい型	学校参加型	実習型	インターンシップ型
○「地域教育実践Ⅰ」 ○「地域教育実践Ⅱ」 （ﾌﾚﾝﾄﾞｼｯﾌﾟ事業） →　子ども理解，学校理解	○近隣公立学校（附属校）等における観察参加等 ○隣接校種の参観	○現行の教育実習継承 ○近隣公立学校の活用	○就職直前実習（近隣公立学校，母校）
			リサーチ型
			○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動
○附属教員による「すぐれた授業」の参観（H17年度試行）	○３年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験（H17年度試行）		

Sumio Wakamoto, Nobukazu Matsuura, Kazuo Nishine, Shunji Maeda, Yasuo Shimizu, Tetsuo Isozaki, Masataka Koyama, Masayasu Nagamatsu, Yoshimichi Yui, Yoshio Ebata, Akemi Kurachi, Eiji Yanagihara, Shiori Miyamoto, Setsuko Okano, Toru Hitokuwada, Kazuhiro Koga, Yuko Okamoto, Takaya Koyama, Toshio Hayashi, Tsuyoshi Uenosono, Koji Mito, Yoshifumi Kono, Ryozou Harada, Hideaki Imasaki, Jyunji Kanamaru, Koji Takemori, Kazuo Hirosawa, Hiroko Komekami, Yoshiko Okano, Noboru Konoeda: A Tentative Trial of 'Distinct Teaching Practice' at Hiroshima University

表－２　中・高等学校教育実習の４年間

１年生	２年生	３年生	４年生
入門型	学校参加型	実習型	インターンシップ型
○「社会科教育入門」，「英語教育入門」等の「入門」「基礎論」系の科目を設定 →　学校の授業参観なども含む	○「学校」を知る，「生徒」を知る。授業は行わず，定期的に学校を訪問する。	○現行では４年生の教育実習を６セメに移行して実施。	○就職直前実習（近隣公立学校，母校） リサーチ型 ○卒業研究にリンクさせた実践現場での活動
○附属教員による「すぐれた授業」の参観（H17年度試行）	○３年生の本実習に観察参加し教育実習の事前体験（H17年度は３年生で試行）	○近隣公立学校等での補充的教育実習	

し，成果を上げている。が，一方で実際に彼らを待っているのは公立学校の教壇である。公立学校園で教育実習を経験してみたいという学生のニーズにいかに応ずるかということも検討課題の一つであった。本紀要33号で提案した試案は，上述したような問題認識や従前の教育実習の成果を合わせつつ，さらなる質的向上と量的拡充の両面を勘案し，４年間を一貫した教育実習でつなぎ，教職意識を，より高め，深め，勉学の質的向上を目指すプログラムとして構想したものであった。

２　研究の目的

本研究の目的は，「特色ある教育実習プログラム」の一部を試行的に実践し，プログラムの有効性を検証することである。先にも述べたとおり，このプロジェクトのメンバーは，昨年，「特色ある教育実習プログラム」を開発し，提案した。その中に，「附属学校で本実習が実施されている期間中に，１学年下の学生を数日間参加させ，次年度自分達が体験すべき実習内容を事前体験させる」というプランが含まれている。これはこのことによって，１年後の実習までに身につけておくべき知識や技能，態度などを自覚させ，以後の学習に対する意欲の向上を図ることが目的である。そこで，この「「教育実習観察」（仮称）」の有効性を検証するために，本年度は何人かの学生を対象として試行的に実施し，その効果を検証することとした。

なお，本プロジェクトの研究は，昨年度から開始された附属教育実践総合センター主導の４年次生（２月時点）でのインターンシップや１年次生の段階で附属学校の「すぐれた授業」の観察をさせる試行（リサーチオフィス：松浦伸和座長）などなど各方面における積極的実践の成果と結ばれて大きな意味を持ってくると考えている。　　（文責：若元澄男）

３　２，３年次における「教育実習観察」

３．１　小学校教員養成の場合

小学校教員養成は，第一類の初等教育教員養成コースで行われている。現在本コースの学生（部分的に同じ第一類の障害児教育教員養成コースの学生も含む）は，教育実習に関しては，３年次の５セメに事前指導としての観察実習，同３年次の６セメに本実習としての教壇実習を履修する。しかし，前回報告において指摘されていた問題点の一つ，すなわち「現行の教育実習以前に教育実習に関わる科目が開設されていないことから，教員志望の学生の学習意欲が低下している」という問題が生じている。そこで提言されていた改善点の一つが，現行教育実習の学年（３年次）の前の「２年次に，実際に学校に出向いて，学校の仕組み，教師の仕事，授業の実際などを参加観察や体験を通して理解させる」であった。

本提言はさらに，近隣公立小学校での年間を通しての授業や行事・活動への一定時間数以上の参加という基本的実習，および３年生が附属小学校で教育実習（本実習）を行っている期間中に３日間程度これに同行させ，次年度に自分たちが体験することになる「ミニマムプログラム」（現行３年次での教育実習内容）を事前体験させるという２つの内容を持っている。今回の「特色ある教育実習プログラム」の実験的，試行的取り組みにおいては，まず後者の附属学校での事前的体験実習を行った。

広島大学には，小学校関係では，附属小学校，附属東雲小学校，附属三原小学校の３校あるが，今回，試行的取り組みということで，参加する学生にとって日帰りが比較的容易な広島市翠町の附属小学校を体験校として選定した。参加時期は，附属小学校と調整し，実習生の一番軌道に乗っている本実習の終わり頃とし，また，２年生にとっては夏季休業中の９月28・29日の２日間とした。参加学生の選別にあたっては，筆

者（前田）がチューターをしている２年生23名に呼びかけ，そのうち時間的，時期的に都合がつく学生，８名が最終的に参加することとなった。

この８名の学生は，副校長および教務委員（附属教員）の配慮で，それぞれ１年生から６年生までの各学年・８クラスに振り分けられ，この２年生には，被観察者および誘導者としての教育実習生（３年次生）が１人ずつ当てがわれた。

２日間の「教育実習観察」に赴く前に，事前のオリエンテーションを実施した。この時，今回の「教育実習観察」の意義・目的，実習校への交通手段と集合時刻，実習中に気をつけるべきこと，服装や言葉遣いなど，関係プリントを配布すると共に指導・助言をした（附属校でも同様に実習中の行動などオリエンテーションを実施）。また，実習前と実習後の心境の変化等に関するアンケート用紙を配布した。

以上，本紀要33号の提言に則って，本実習生における一連の授業過程「授業計画（指導案の作成）→授業の実施→授業の振り返り」を観察し，また学校の様子を見たり，子どもたちへの接触を図るという試みを実施した。このことへの参加学生の詳しい感想は，後述のアンケート分析にある通りであるが，総じて期待通り，教員になろうという意識の向上と明確化，学校を知り，生徒を知ることができた，次年度の実習に向けての意欲の向上と授業内容に関連する知識の拡大の必要性等の認識が深まったという反応を得た。結論的には，２年生での「教育実習観察」は効果的であったといえる。しかし，問題点として，附属校から（後掲の附属教員のアンケート分析結果参照），２年生全員を受け入れる時に生じる教室の広さの問題，３年生の教育実習生にかかる負担感などの指摘があった。こうしたことから，実習観察時期や期間，３年生５セメでの観察実習との関係，近隣公立小学校との連携をいかに図るかなどを今後の課題として確認できた。

（文責：前田俊二）

３．２　中・高等学校教員養成の場合

広島大学においては教育学部第二類～第五類及び他学部の学生が４年次に４つの附属学校において中・高等学校教育実習（教壇実習）を履修することになっている。平成17年度後期の教育実習期間は10月６日～10月20日であったので，この期間中に，教育学部第二類～第四類の３年次生の希望者を対象にして「教育実習観察」（卒業等要件単位外）を試行することとした。

この「教育実習観察」は，第２節で述べたように，実習校（附属学校）において中・高等学校教育実習を行っている４年次の実習生１名に，その実習生と同じコースの３年次の観察実習生１名を数日間同行させ，１回の教壇実習にかかわるすべての活動－教材研究，学習指導案作成，学習指導案チェック，授業参観，批評会－を体験させようとするものである。それによって，３年次生に次年度の教壇実習までに身に付けておくべき知識や技能，態度などを自覚させ，「教育実習観察」以後の学習に対する意欲の向上を図ることを目的としている。

そこで，平成17年度は以下のような具体的な手順で，中・高等学校教員養成の一環としての「教育実習観察」を試行的に実践し，その効果を検討することとした。

(1)教育学部第二類～第四類の11コースの教育実習部会委員は，各コースの３年次生に対して「教育実習観察」の趣旨を説明し，コースごとに希望者をリストアップし，同行させる４年次教育実習生とのペアを確定させ，９月15日までに学生支援グループ教育実習担当へ届け出る。

(2)「教育実習観察」を希望する３年次生全員を対象にして，10月３日にオリエンテーションを開催し，「教育実習観察」の趣旨や具体的な内容を説明するとともに，事前アンケート調査「教職に対する意識調査（１回目）」及び都合の悪い日程調査を実施する。

(3)学生支援グループ教育実習担当は，３年次生の希望者の教科，実習校（附属学校），同行４年次生，同行不可能な日程などを集約・整理し，各実習校（附属学校）へ10月４日に連絡する。それを踏まえて，10月５日の附属学校オリエンテーション時に「教育実習観察」の希望者ごとに具体的な日程や方法を決定し，そのことを４年次生から３年次生へ連絡する。

(4)後期の教育実習期間（10月６日～10月20日）中に，３年次生はそれぞれ指定された日程で，４年次教育実習生に同行し，１回の教壇実習にかかわるすべての活動―教材研究，学習指導案作成，学習指導案チェック，授業参観，批評会―を体験する。なお，その際には，当該コースの大学教員もできる限り訪問指導をする。

(5)「教育実習観察」の効果を知るために11月17日に，「教育実習観察」を履修した３年次生全員を対象にして事後指導を行い，事後アンケート調査「教職に対する意識調査（２回目）」を実施する。

以上のような手順で平成17年度「教育実習観察」を試行したところ，表－３のように各教科・実習校（附属学校）において，教育学部第二類～第四類の３年次生79名がこれを履修した。79名が「教育実習観察」を行った教科や実習校（附属学校）に人数のばらつきが見られる。それは，平成17年度は３年次生全員ではなく希望者のみを対象としたことと，数日間同行する４

年次教育実習生を３年次生の希望を考慮して選考したことによると思われる。いずれにしても，大変あわただしい日程であったにもかかわらず予想以上の多数の３年次生が「教育実習観察」を履修したということは，このような事前実習に対して多くの学生が興味・関心をもっていることを如実に物語っていると考えられる。

表－３　中・高等学校「教育実習観察」履修者

	広島	東雲	三原	福山	計
国語	0	3	2	3	8
社会	8	1	0	0	9
数学	1	2	1	0	4
理科	1	2	1	0	4
英語	9	2	3	5	19
音楽	2	1	1	2	6
美術	1	0	1	1	3
体育	3	1	1	3	8
家庭	6	0	2	3	11
技術	2	2	2	1	7
計	33	14	14	18	79

次に，79名の３年次生が後期の教育実習期間（10月６日～10月20日）中に，実際にどのような日程で「教育実習観察」を行ったか，同行し観察した４年次生の教壇実習日に注目してみると，次の表－4のようになる。

表－４　中・高等学校「教育実習観察」の日程

10月○日	7	11 12 13 14	17 18 19 20
観察(人)	1	4 9 14 19	4 15 9 4

このことから，１名を除く78名は教育実習期間（10月６日～10月20日）中の第２週目と第３週目に「教育実習観察」を行ったことがわかる。４年次生の教壇実習の日程が決まるのが前日10月５日の附属学校オリエンテーション時であり，その後４年次生から３年次生へ連絡し，２～３日間同行するとなると，このような状況は当然のことと言えるかもしれない。

次節では，こうした「教育実習観察」の成果を，学生に対するアンケートと附属学校からの評価をもとに検討する。　（文責：小山正孝）

４　「教育実習観察」の成果

４．１　小学校実習関係

４．１．１　学生に対するアンケートから

前述したように小学校「教育実習観察」に参加した第一類初等教育教員養成コース２年生・８名（男５名・女３名）に対して，実習観察前と後で学習への意欲等に変化が見られるかどうかを検討するために，実習観察の前後にアンケートを実施した。

【調査内容】1)実習前調査

①入学動機について（５項目，各４段階評定），②授業への期待感について（６項目，各４段階評定），③学習への態度や意欲について（５項目，各４段階評定），④将来の見通しについて（１項目，６選択肢）

2)実習後調査

実習前調査と同様の項目（①～④）に加えて，「教育実習観察」前後の心境の変化として，⑤教員志望への意欲，⑥教育実習への意欲・考え方，⑦３年生での教育実習に向けての取り組み，⑧その他の心境の変化，について自由記述を求めた。また，今回試行的に行った「教育実習観察」について，⑨実習観察の時期と期間，⑩教育実習生（３年生）への関わり方，⑪３年時に行われる観察実習（教育実習指導 A）との関係，⑫その他の意見，という項目を設け，それぞれについての意見を自由記述させた。

【結果】1)入学動機

実習観察参加者の入学動機は平均値が高い順に，「教師になるために適当な大学であるため」(4.00)，「成績などの実力にあった大学であるため」(3.25)，「学びたいことが学べる大学であるため」(3.00)，「先生や親などに勧められたから」(2.75)，「自分の就きたい仕事(教師以外）に有利であるため」(2.00）であった（平均値はいずれも実習前調査の値)。

2)授業への期待感の変化

実習観察前後での授業への期待感の各平均値を図示したのが図１である。

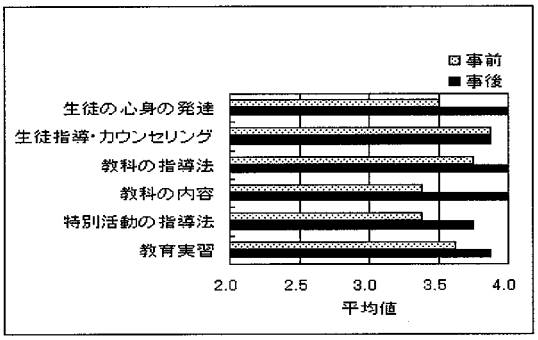


図１　事前と事後における授業への期待感の平均値

統計的検定の結果，「生徒の心身の発達に関する科目」「教科の専門内容に関する科目」「特別活動の指導法に関する科目」において，観察前より後で期待感が高まったことが示された。その他の３項目については

統計的な有意差は見いだされなかったが，いずれも観察前の平均値は高く，天井効果のために観察後の期待感が高まらなかったと推測される。

3)学習への態度や意欲の変化

実習観察前後での学習への態度や意欲の各平均値を図示したのが図２である。統計的検定の結果，測定した５項目中４項目（「授業には必ず出席している」「授業などに遅刻しない」「授業態度はまじめである」「専門教科に関する勉強を自主的に行っている」）で観察前より後の平均値の方が高いことが示された。つまり，実習観察により学習への意欲や態度が高まったといえる。

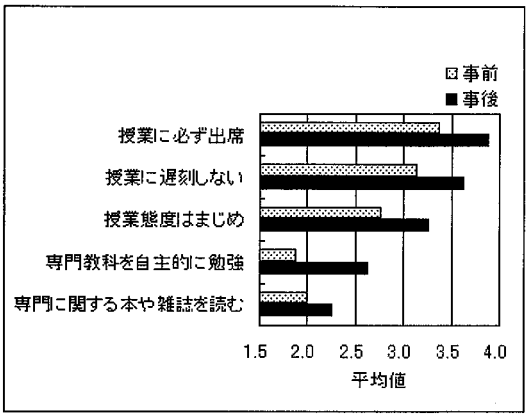


図２　事前と事後における学習への態度や意欲の平均値

4)将来の見通しの変化

調査前は「はやく先生になりたい」が４名，「まだ決めていない」（３名），「その他（教職に就くか，大学院進学かで迷っている）」（１名）であったのに対して，調査後は「はやく先生になりたい」が５名，「まだ決めていない」が３名と，調査前後で将来の見通しまでは大きく変化していないことが示された。

5)心境の変化（自由記述）

①教員志望への意欲:「大学に進学する以前から将来就きたい希望の職業として教員という考えは抱いていたが，今回の体験によりその気持ちがより強く，より明確になった。」という記述に見られるように，８名全員が教員志望の意欲が高まったと報告した。一方で，実習を観察することを通じて教員の仕事のたいへんさについて実感したり，不安を抱いたという感想も半数あった。②教育実習への意欲・考え方：実習観察を経験することで，教育実習に対する心構えやイメージを具体的に持つことができるようになったという回答が８名中５名で見られた。教員志望への意欲と同様に，教育実習に対する意欲が高まったことを示す記述も多く見られた。③３年生での教育実習に向けての取り組み：大学での授業に今まで以上に真剣に取り組みたいとする感想が多く見られた。「これまでは，指導案といわれても，それが何かすらわからず，その必要性に気づくこともなかった」という記述に代表されるように，指導案の作成だけではないが，大学での授業内容が実践とどのように結びつくのかが，実習観察を通してより明確になったようである。④その他の心境の変化：「教師になろうという意欲は，そのまま学習の意欲へとつながります。学ぶ意欲も以前より確実にわいてきました。」という記述にもあるように，ここでも学習意欲が向上したことを指摘する記述が目立った。大学の授業への取り組みだけではなく，「学校が見学できる機会や現場で働く人の話を聞ける機会があれば積極的に生かしていきたい」というように，教職に就くために様々な機会を生かしたいという意気込みも示されている。

6)「教育実習観察」についての意見（自由記述）

①時期と期間:「教育実習観察」を行う時期としては，今回実施した９月後半が教育実習を行っている３年生もある程度慣れた時期であること，自分たちが９月の夏季休業中で時間がとりやすいことなどから適切であるとする意見が多くを占めた。観察期間が２日間であったことに対しては，短すぎるとする意見もあったが，適切とする意見の方が多かった。適切とする理由は，１日だと十分に理解できないが，これ以上長いと実習生や附属の先生に負担がかかりすぎるということや，短いからこそ本実習への意欲がつながるといったことであった。②教育実習生（３年生）への関わり方：３年生から直接話しを聞くことができてよかったという意見と，関わるにあたって実習の邪魔にならないよう配慮したという意見が多く見られた。③３年時に行われる観察実習（教育実習指導 A）との関係：今回の「教育実習観察」では，観察実習では見ることのできない教育実習生の姿や取り組みの様子を直接観察することができたので，そのことに関する意義を指摘する意見が多く見られた。④その他の意見：その他の意見では例として「２年生全員が実習観察をすることに伴う教室の広さの問題等」を挙げていたことから，それに関する意見が多く述べられていた。現実的には３年生が５人既に入っているところに２年生がさらに５人入ることは難しいとする意見がその多くを占めた。

以上に示したアンケート結果からは，２年時に行う「教育実習観察」は，参加者の学習意欲や態度の向上のみならず，教員志望への意欲も高めることから非常に有意義な取り組みであることが伺える。しかし，もしこの取り組みを必修化して２年生全員が参加ということになれば，初等教育教員養成コースの場合は学生

の在籍数が非常に多いために，実習生や指導教員にかかる負担の問題や，受入校における物理的スペースの問題が生じることも明らかである。３年生の教育実習を観察させるからこそ得られる固有の効果はもちろんある。従って，それをねらうのであれば，現実的には「教育実習観察」は人数制限を設けた選択制としなくてはならないであろう。また，在籍学生に対して広く学習意欲の向上をねらうのであれば，１，２年生時期に教育実習とは重ねない授業参観や学校現場体験を仕組む必要があるであろう。　　（文責：神山貴弥）

４．１．２　附属小学校からの評価

今回の試行的「教育実習観察」について，受け入れ校であった附属小学校側の評価（見解）を，指導にあたった教員へのアンケートを中心にしてまとめてみたいと思う。

今回の試行に本校が受け入れた学生は８名であり，受け入れた８クラスの担任に，「①学生の態度や意欲，②教員の指導意欲の変化，③「教育実習観察」の将来の見通し，④このシステムの評価，⑤意見，感想（自由記述）」の５観点からアンケートを行った。

①学生の態度や意欲について

結論から述べると，評価は二分された。希望者を募っての試行とは言うものの，準備期間の不足が影響しているのか，主旨を十分に理解できないままの参加となった者もいたようである。特に，メインであった本実習生との交流が十分でなかったと評価している教員が3名いるのが気になるところである。

②教員の指導意欲の変化

やや高くなった者２名，特に変わらない者６名という結果になった。準備・周知期間の不足で，教員側も何をどのように指導すべきかよく理解できないままこの試行を迎えたというのが事実であろう。

③将来の見通し

今後も続けるべきが４名，続けるべきではないが２名，どちらとも言えないが３名という結果になった。肯定評価としては，本実習の前の準備段階として意味がある，本実習生にとっても励みになっていたという意見があった。一方否定評価としては，効果が未知数，本実習生にとっての負担感の増加が挙げられていた。いずれにしても，今後は，教員にもこの制度導入の意図や効果について明確な説明が必要であろう。

④システムの評価

実習日数について，２日間が適当だったとする者とせめて１週間以上必要とする者が二分された。受け入れ人数１，２名が適当とする者が６名で，教室のキャパシティーの問題が感じられる。本実習生への教育実習観察生のかかわり方に関して，改善を要すると思う者と現状でよいと思う者もほぼ二分されていた。

⑤意見，感想

多々あったが，改善に向けての現状を踏まえての意見のみ集約しておきたい。現在の施設・設備状況では多人数を受け入れるのは無理があること，本実習の学生への指導だけで教員は手一杯であるため，教育実習観察生への指導は，この期間大学教員が専属で複数名附属学校に詰められるなどして指導にあたることも必要ではないか，といった意見があった。効果的な実習となるよう，趣旨の徹底と指導体制の改善を望みたい。

（文責：林俊雄）

４．２　中高実習関係

４．２．１　学生に対するアンケートから

ここでは中学校・高等学校の「教育実習観察」の受講生に対して行った「教職に対する意識調査」アンケートをもとに，結果および考察を述べることとする。

このアンケートは，「教員養成のカリキュラム作成に役立てるため」という趣旨のもと，「教育実習観察」受講生全員を対象に，実施前（平成17年10月３日）と実施後（平成17年11月17日）の２回行ったものである。実施前アンケートの総数は71名，実施後アンケートの総数は79名で，ほぼ受講生全員の回答を得られた。

質問項目は，「1．教職に対する意識」「2．授業への興味・関心」「3．学習への態度や意欲」「4．将来の見通し」「5．『教育実習観察』における心境の変化」「6．『教育実習観察』のシステム評価」「7．その他（自由記述）」それぞれに関する７つの項目であった。このうち１～４は，教職全般に関するものとして実施前と実施後共に行った質問項目であり，また５～７は実施後のみの「教育実習観察」に焦点化した質問項目であった。

以下(1)教職全般に関する意識の変化（質問項目１～４），および(2)「教育実習観察」に関する意識（質問項目５～７）の２つの観点に分けて述べることとする。

(1)　教職全般に関する意識の変化（質問項目１～４）

「1．教職に対する意識」に関する小項目の中で変化が顕著であったのは，「4．教師は楽しい仕事であると思う。」「5．教育実習など実習系の授業が少ないと思う。」（「当てはまらない」１⇔４「当てはまる」）という２項目であった。教師の仕事を楽しいと感じていたものが，実施前の59.2%（「3：まあまあ当てはまる」＋「4：当てはまる」）から実施後79.7%に伸び，20.5ポイント上昇している。また実習系の授業の少なさについては実施前の70.5%（「3：まあまあ当てはまる」＋「4：当てはまる」）から実施後は82.2%，11.7ポイント増加し，

受講生は実習系の授業がこれまで以上に増えることを望んでいることがわかる。

また「2. 授業への興味・関心」の中では，「生徒・児童の心身の発達に関する科目」への興味・関心の度合いが実施前の83.1%(「3:まあまあ興味がある」+「4:興味がある」)から91.2%へ，8.1ポイント上昇していた。しかし，その他の生徒指導やカウンセリングに関する科目，教科の指導法に関する科目，教科の専門内容に関する科目，教育実習に関する科目についても，実施前・実施後いずれも90%前後あり，もともと受講生の意識が高いものだったと言える。

「3. 学習への態度や意欲」における小項目の中で特に変化が顕著であったのは，「4. 専門教科に関する勉強を自主的に行っている。」(「4：当てはまる」実施前9.9%→実施後26.6%，16.7ポイント上昇)という項目と，「5. 専門に関する本や雑誌を読んでいる」(「3：まあまあ当てはまる」＋「4：当てはまる」，実施前43.7%→実施後65.8%，22.1ポイント上昇）という項目であった。これらは「教育実習観察」を終えた受講生が，本来，学習とは受身ではなく主体的であるべきことを再確認した結果と言えるのではないだろうか。

更に「4. 将来の見通し」に関する項目で，実施前も実施後も一番高かったのは，「1. はやく先生になりたい。」で（実施前42.3%，実施後40.5%）あった。変化があったのは，「5. まだ決めていない。」という項目で，実施前の26.8%から実施後の13.9%に（12.9ポイント）減少している。その代わり増加したのが，「6. その他」（4.2%→12.7%，8.5ポイント上昇）と「3. 大学院に進学したい。」(15.5%→20.3%，4.8ポイント上昇）であった。「6. その他」の理由として多かったのは「もう少しいろいろ勉強したい」といった類のもので，具体的な進路は決めかねているものの，漠然と更なる学習の必要性を感じたため，このような回答になったのではないかと考えられる。

(2) 「教育実習観察」に関する意識（質問項目５～７）

質問項目５は「今回の『教育実習観察』を終えて，それ以前と以後ではどのように心境が変化しましたか。」，質問項目６は「『教育実習観察』のシステムの評価」に関するものであった。(質問項目７は感想等の自由記述)

まず質問項目５の中の「1. 教員志望への意欲」について，高まったと感じた受講生が58.3%(「高くなった」45.6%＋「とても高くなった」12.7%）おり，また「2. 教育実習（本実習）への意欲，期待感」についても，高くなったと感じた受講生が77.3%（「高くなった」60.8%＋「とても高くなった」16.5%)，「3. 大学での授業への意欲，『教育実習への準備』への意識」についても，高くなったと感じた受講生が77.2%(「高くなった」54.4%＋「とても高くなった」22.8%）おり，どの項目に関しても一様に高い数値が出ている。このことから今回の「教育実習観察」が，受講生の心境に大きな変化を与えたと言うことができるだろう。また「4.『教育実習観察』を終えて，一番実感したことは何ですか？」という自由記述の中で特に目立っていたのが，「自分の普段の勉強量の少なさ。」「今はまだ準備不足で今の状態ではとても実習を行うことはできないので，勉強しなければならないと強く感じた。」「専門教科に対する自分の勉強不足を痛感した。」といったものだった。これは現時点における自分自身の力量のなさを反省しつつ今後の学習に対して前向きに取り組む姿勢と見ることができる。この点からも早い段階で教育現場を観察することが，大学での学習の位置づけや意味を再確認することになり，ひいては今後の学習への意欲や本実習への意識を高めることにつながると言えるだろう。

次に質問項目６「『教育実習観察』のシステムの評価」であるが，まず実習日数は教科によって異なっており，一番多かったのが２日間（91.1%)，次に３日間（3.8%）であった。その中で今回のシステムを「適当だった」と答えた受講生は84.8%に上っており，好評だったと言えるだろう。しかし募集方法については，改善を要すると考えている受講生が36.7%おり，システム上の問題点が多少あったことは否めない。その具体策として一番多かったのが事前の説明に関するもので，「もっと早めから事前指導をしっかり。コースによって隔たりがあった」「期間が短くて急だった」「多少わかりにくいので，説明をたくさんして欲しい。」といった意見が見られた。今回の「教育実習観察」を提示したのが夏季休業中だったこともあり，当初から連絡上の問題点が予想されていたが，受講生の回答がこれを裏付ける形となった。しかし「教師になりたい後輩にこの実習への参加をすすめたいか」という問いには，当てはまると答えたものが実に93.7%（「まあまあ当てはまる」36.7%＋「当てはまる」57%）にも上り，今回の取り組みがシステムとして非常に有益だったことが読み取れる。

また最後の質問項目７（自由記述）では多岐にわたる意見，感想が寄せられたが，中でも「とても良い勉強，経験になった。」(17名)，「いろいろ見ることができ，いい経験になったので，この実習は続けて欲しい」（５名)，「ついた先輩の邪魔や負担になっていなかったか，気が散らなかったかが心配」(８名)「学校によってこのシステムは効果を発揮するかどうか決まる。」等の意見が目立った。

以上「教職に対する意識調査」アンケートをもとに，２つの観点にわけて述べたが，これらの結果を総合すれば，今回の「教育実習観察」は受講生にとって大変有意義なものだったと言えるだろう。募集の方法や実習校における実習生の位置づけ，動き等について改善を要する点もあるが，今回の「教育実習観察」が受講生の意識に与えた影響は大きく，多くの受講生が今後も継続していくことを望んでいたことに，このシステムの大きな意義が見出せる。より良い体制を整えていくことで，大きな効力を発揮することは十分期待できると思われる。　（文責：一鍬田徹）

４．２．２　附属中・高等学校からの評価

今年度の後期教育実習において試行実施された「教育実習観察」プログラムは，一部の学生にとっては非常に有効であったと思われる。自分の先輩が教育実習で実際どのようなことをしているのかを自分の目で確かめ，次年度の自らの教育実習へ向けて，心の準備をするという点では，貴重な経験である。中には，非常に意欲的で，実習の観察のみならず，授業準備を手伝ったり，批評会では積極的に意見を述べる学生もいたという。このような学生には，現在行われている「教育実習指導Ｂ」以上の効果があったと思われる。

一方，さまざまな問題点も指摘されている。まず，参加学生の問題である。今回は希望参加であったが，このプログラムに参加して，本当に意味があったのかどうか疑わしい学生もいたという。指導案の書き方も知らず，もちろん授業を批評することもできない。しかも，批評会ではメモをとることもなく，ただ居るだけという状態である。このようなことをなくするためには，参加する学生に「教育実習観察」に関するレポートを課すことも必要であろう。また，この取り組みを有効なものにするためには，大学において，本人の意欲や態度のチェックのみならず，基本的な観察の視点等についての事前指導が不可欠であろう。

次に，受け入れ側の問題として，参加者の名簿づくり，出欠席のチェック等の事務量の増加がある。また，物理的なスペースの確保も問題である。控え室は現在，本実習生だけでも余裕はない状況であるが，「教育実習観察生」が増えると，さらに狭くなってしまう。また，本実習生がホームルームに配属されており，現在各クラス８～９名である。本年度のように少人数の希望者であればさほど問題はないが，仮に３年生全員に義務づけられると，観察日をうまくずらす等の調整が必要となろう。

実習期間中，教師は本実習生の指導で手一杯である。そのために，「教育実習観察生」にはほとんど構ってはおれないというのが実情である。参加学生が大学生気分で，校内を自由に歩き回られたりするのも困る。そのような中で，誰が「教育実習観察生」の指導・管理をするのかという問題もある。

したがって，「教育実習観察」は当面，教育学部３年生の希望する学生に限定し，事前指導をした後，参加させるのがよいと思われる。　（文責：原田良三）

４．２．３　附属東雲中学校からの評価

本校に派遣された「教育実習観察生（以下，「観察生」）は14名であり，期間については２日間が10名，３日間が２名，４日間が２名であった。それに対して直接指導に当たった本校教員は11名であった。

観察生には副校長が登校時に出勤確認及び目標を，退勤時にはその日の成果と課題を本人から聴取した。その聞き取りから得られた結果として，観察生から成果としてあがった主なものは「来年度への見通しが立った」「これからやっておかなければならない自分の課題や勉強すべき内容が見えてきた」ことであった。課題としてあげられたことは実習方法についてであり，どこまで行動や発言，生徒との関わり等を行ってよいのかといった戸惑いが観察生に見られたことである。

直接指導した教員からの観察生の実習状況や評価については「全般的に問題意識をもって観察に参加していた」「実習へのモチベーションを高めることができ効果的な取り組みと感じた」，また本実習生との関わりや指導教員との関わりについては「素直な質問を実習生にぶつけることで双方にとってよい刺激になった」「本実習生が答えられない質問に指導教員が対応することにより，確かな教職のイメージをもつきっかけになった」等，肯定的に評価した教員がほとんどであった。しかし生徒との関わりについては，ペアである本実習生の観察を通しての実習を旨としたため，活発とはいえない状況がみられた。

これらのことは，指導教員にあてた最終的なアンケートからも伺える。「当てはまる」か否かによる4件法で行われた項目の内，観察生のまじめさについては3.91と最も高く，本実習生との関わりについては3.18，生徒との交流については2.18であった。また，観察生の教員志望への意欲については3.45という結果であった。「改善を要する」か「適当であったか」を問う項目については，実習日数に対して11名中９名が，受け入れ人数に対しては10名が，実習時期に対して10名，本実習生への観察生の関わり方に対して８名，実習校生徒への観察生の関わり方に対して７名の教員が「適当だった」と回答した。なお，「教育実習観察」は「良い

ことである（続けるべきである）」か否かについては，11名中10名が良いことであり続けるべきと回答している。

今回初めての取り組みであったが，総合的にみれば成果があり，今後とも継続して実施していくべきだと考えられるが，課題に対する改善策についての具体的な案は見いだせない。観察生の生徒や批評会への関わり方等，実習方法の明確化や教育実習全体の中における「教育実習観察」システムのあり方の検討を継続しつつ，さらに研究実践を行っていくことが望まれよう。

（文責：今﨑英明）

4．2．4　附属三原中学校からの評価

本校では，本実習生に対して「教育実習観察生」を「くっつきさん」と呼び，本実習生が学ぶ姿を見て学ぶということを大きなねらいとしてこの事業を進めた。

まず校長室で副校長から出勤時間の確認を受け，学校の決まりや今日１日の過ごし方の指導を受ける。とても緊張する時間であり，気持ちを新たにする時間でもある。その後待機しているところへ本実習生が迎えに来る。ここで「～です。今日１日よろしくお願いいたします。」という最初の挨拶を交わす。学ぶ立場としての心構えと礼を意識し，学ぶ意欲を高揚させる。その後「くっつきさんのくっつきさんたる学習」を終え，退勤時はまた副校長と，どんな活動をしたか・参加してみてどう感じたか・どうしてほしいか・来年への意欲につながったか等を確認し帰途につく。

学習の意義を振り返る彼らに接し，話し合いの中で，あるいは彼ら自身が思いを書いて提出したもの等から附属三原中学校の副校長としてつかんだものを記述してみる。

(1)来年「自分ならこうしたい」というものを多く持ったなあと思える発言が多かった。本実習生に２日間べったりと付くことにより，教育実習に対する見通しが持てたのであろう。

(2)本実習生の言動はしっかり受け止めてはいるが，観察生には直接力を出す場面があるわけではない。しかしその分，「力をためた」という感じを受けた。この経験が本実習での肥やしに為るという期待感が持てた。

(3)「こんなことを（大学で）学びたい」という言葉が多く聞かれた。大学で学んでいることが実践の中でどう生かされているか，感じてきたものと思われる。今後一層「何をどう学んでから実習に臨めばいいか」という視点が，具体的になっていくと予想される。

(4)本実習生や本校の教師の言動から，授業の作り方，授業の修正の仕方，授業をどう見るか等を少しではあるが感じ取り始めている。教材研究の意味や教材研究の仕方について，自分なりに考え始めるきっかけになったと思われる。

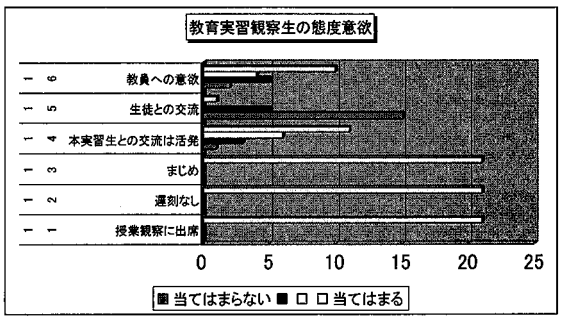
(5)出勤・退勤のけじめや，校外や転勤後の生徒との関係の在り方等，教師としての勤務の在り方を多少は感じている。また，生徒から「先生」と話しかけられた経験を通し，「先生」と呼ばれることの責任や，教師としての資質についても考え始めている様子が伺えた。

（文責：金丸純二）

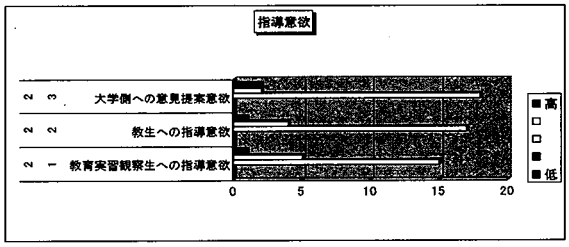
4．2．5　附属福山中・高等学校からの評価

―― 附属福山中・高等学校における教員アンケート結果（回答数23名）から ――

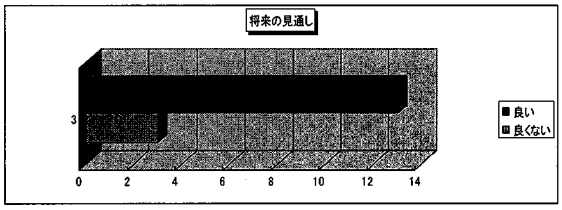
実施後に教員を対象に行われたアンケート結果をもとに，今回の取り組みを評価し，さらに提言と要望をいくつか述べる。



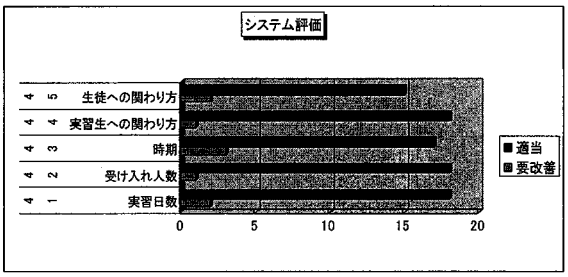
1.1～3「態度・意欲」については概ね問題はない。1.4「実習生との交流」にいくらか問題がありそうである。これは，自由記述にもあったが，ぎりぎりのところで取り組んでいる本実習生への負担や影響があるのではないか。1.5「生徒との交流」については，「教育実習観察」の趣旨に照らせば，そもそも「観察」なのであるから，この項目自体がナンセンス。1.6「教員への意欲」についてだが，副校長は今回，出勤・退勤時に全員の面談をしたが，それからみると全体的には好ましい態度・意欲であるが，長時間その勤務を見た教員からすれば，なかにはいくらか問題のある学生もいるようである。



2.1〜3へと，「高」が増加する。「基礎学力があり，真に教員を志望する者のみを参加させてほしい」というような要望記述などに，最近の学生の様子に危惧を抱いていることがわかる。一方で，意欲があり熱心で，しかも確かな課題をつかんで帰っていく学生を見て，今後への指導意欲を確認している教員も多い。



このようなシステムが有効に作動して，真に意欲の高い学生をすぐれた教員に養成できればこのうえない。ただし，このような目標に向けてこのシステムが最善であるのかどうか，検討が必要である。「学部全体で，あるいは専門職大学院構想との関係を整理しつつ，トータルなプラン」の提示が必要なのではないかという意見もある。



前述したように，この取り組みはそもそも「教育実習観察」である。したがって，「生徒と触れ合いたい」「生徒と触れ合わせたい」といった声は，本来の趣旨から逸れた，本質をはずした意見でしかないであろう。4.5「生徒への関わり方」において「適当」が多いのは，1.5「生徒との交流」での数値に照らせば，生徒と関わらせるべきであるという声でないことは，確認しておかなければならない。

そもそも，この「教育実習観察」が何を目指すのか，見定めなければならない。そのために，以下のことを提言する。

①学生のモチベーションを高め，教師たるに足る学力をつけさせるためのカリキュラム構想。

②各研究室において本実習を終えた学生が後輩に課題を確実に伝えるシステム作り。

③観察のポイントが示され，それに沿って記入することのできる「教育実習観察ノート」の作成。

④個人の負担を軽減し，１対１対応ではなく教科全体で実施する「教育実習観察」への模索。

最後に，附属の教員のすべてが要望するのは，施設・設備面の改善である。これまでの施設・設備面では限界に来ている。この「教育実習観察」の拡大・継続のためには，その改善が不可欠であることを確認しておきたい。（文責：竹盛浩二）

5　「教育実習観察」の課題と展望

何箇所かで述べられているように，この取組は，その決定時期や本実習中に行わなければならないという制約のために性急に行わざるを得なかった。にもかかわらず，その成果は期待していたよりもはるかに大きいものであったと評価できる。小学校においても中・高等学校においても，参加した学生の学習意欲や授業態度の向上のみならず，教員志望への意欲を一層高める結果となった。今回は，自主的に参加した学生だけであるという事情を考慮しても，わずか２，３日の取組でこれだけの意識変化をもたらすことができたという教育効果は，高く評価されなければなるまい。同じことを，講義など大学での指導だけで行おうとすれば，どれだけの時間がかかるか計り知れない。それを短期間で達成できるのであるから，この試みは来年度以降も継続して行う価値があると評価できる。

しかし，残された課題も多い。まずは，システムの整備である。今回は「試行的」というタイトルが示す通り，実施までの期間が極めて短かったために，実習生の位置づけや役割，動き等について大学と附属，３年生と４年生との間などで，綿密な打ち合わせができなかった。そのために，一部で混乱を招く結果となった。次に，実習生や指導教員にかかる負担や，附属校におけるスペースの問題である。「特色ある教育実習プログラム」は，教育学部生を対象とするものであるので，他学部生も履修する本実習と比較すれば数は少ない（小学校はほぼ同数）。とは言え，附属学校のキャパシティーを超える学生を受け入れることになりかねない。この調整と手だてが必要である。

本学は，「到達目標型教育」を掲げて，質の高い確かな学力を保証する大学であることを宣言している。とりわけ質の高い教員養成は，本学が全国に誇れる特色の1つであることは疑いない。今後とも，その中核をなす教育実習システムの構築を目指す取り組みを継続して行っていきたい。（文責：松浦伸和）

参考文献

「広島大学における『特色ある教育実習プログラム』の構築に向けて」　広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要〈第33号 2005.3〉pp.31-40